2025年4月10日
一般社団法人日本家族看護学会総務委員会　COVID-19 調査研究プロジェクト報告

新型コロナウイルス感染症拡大下での子育て期にある家族の機能と経験 -Photovoice methodによる探索- 報告書

JARFN　COVID-19 調査研究プロジェクト質的研究２・WG報告
一般社団法人日本家族看護学会COVID-19調査研究プロジェクト
法橋 尚宏（神戸大学）
小林 京子（聖路加国際大学大学院）
松澤 明美（北海道大学大学院保健科学研究院）
鈴木 征吾（元東京医科大学）
西垣　佳織（聖路加国際大学大学院）

背景：子どもと家族への影響

- 新型コロナウイルス感染症により、子育て期にある子どもと家族は様々な影響を受けてきた

- 成育医療研究センターによる保護者と子どもを対象とした調査では、小学４年生以上の子ども293人のうち16%で中等度以上のうつ症状を示唆（国立成育医療研究センター, 2023）
- 学校や保育施設の閉鎖や行事の中止が子どもの心身に影響（田中, 2021; 西舘, 2021; 福間, 2021; 大谷,2020）
- 保護者のストレス（能條,2021; 半谷, 2021）
- コロナ禍における貧困と健康格差　（後藤, 2021; 鳶, 2021）
- 支援の必要性があるひとり親家庭の存在（五十嵐, 2021; 西坂,2021）

背景：子どもと家族への影響

- 新型コロナウイルス感染拡大下で、家族ユニット、家族員の生活に変化と調整が必要な状況に対し、家族が調整機能を発揮し適応してきたと考えられる
- しかし幼児期の子どもを養育する家族において新型コロナウイルスの感染拡大後に家族の健康状態が悪化したと報告されており(Feinberg et al., 2022)、調整機能が困難な場合には機能不全を起こし、虐待などの家族病理を発した家族の存在が推測される
- 新型コロナウイルス感染拡大に伴う子どもの心身の影響や保護者のストレスに関する問題点が指摘されている一方で、新型コロナウイルス感染拡大が子どもを養育する家族に及ぼす心理的影響や家族員の相互作用に着目して質的な分析を行った国内の研究はまだない

先行研究の状況

- 家庭内感染の疫学的な検討（田原, 2021; 足立,2020）や妊婦の感染予防に関する実態（福間, 2021）に焦点を当てた調査
- 家族の精神的健康に関連した研究テーマ
  - 休校中の中学生と保護者を対象にした心の健康に関する質問紙調査（井田, 2021）
  - 休校中の小学生を対象にしたストレスに関する質問紙調査（国藤, 2021）など

目的

本研究は、新型コロナウイルス感染症拡大の中での子どもを養育する家族ユニット構成員（家族員）および家族の困りごと、家族の変化・必要な調整や調整の結果として家族が得た力あるいは機能不全の有り様など、家族ユニットとしての経験を明らかにすることを目的とする

方法　1

- **調査期間**
  - 2024年10月 ～ 2025年2月

- **リクルート方法**
  - 研究者所属施設のホームページ、Facebookにてポスターにて募集
  - 研究参加への興味を持った家族は研究者に連絡をし、研究の説明を実施

- **倫理的配慮**
  - 聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：23-AC065）

方法　2

- **データ収集**
  - フォトボイス法によるインタビュー調査（Shaw, 2020）
    - 参加者自身が撮影テーマに即して撮影した写真を題材にディスカッション
    - 本人にとって象徴的な出来事や経験の想起を促進

- **データ分析**
  - テーマ分析（Braun and Clarke, 2006）
    - 逐語録を作成し、以下のプロセスで質的帰納的に分析
      - 書記コード作成
      - テーマ探索
      - テーマの検討
      - テーマの定義づけと命名

結果：対象者の概要

- 全国の様々な地域で生活する4家族が研究参加
- 子どもに慢性的な健康問題あり：3家族（家族A･B･D）

表1. データ収集時の対象家族の概要

家族ID	同居家族員数	家族構成	家族発達の時期
A	3	子（中学生）･母	第2教育期
B	3	子（高校生）･母･父	第2教育期
C	3	子（小学生）･父･母	第1教育期
D	4	子2人（小学生）･父･母	第1教育期

＊家族発達の時期:森岡の8段階による　森岡清美編著/現代家族のライフサイクル, 培風館(1977),p.68-71.

家族のプライバシーに配慮し、写真掲載を制限して結果を報告しています。

結果：家族 A

- 家族の紹介

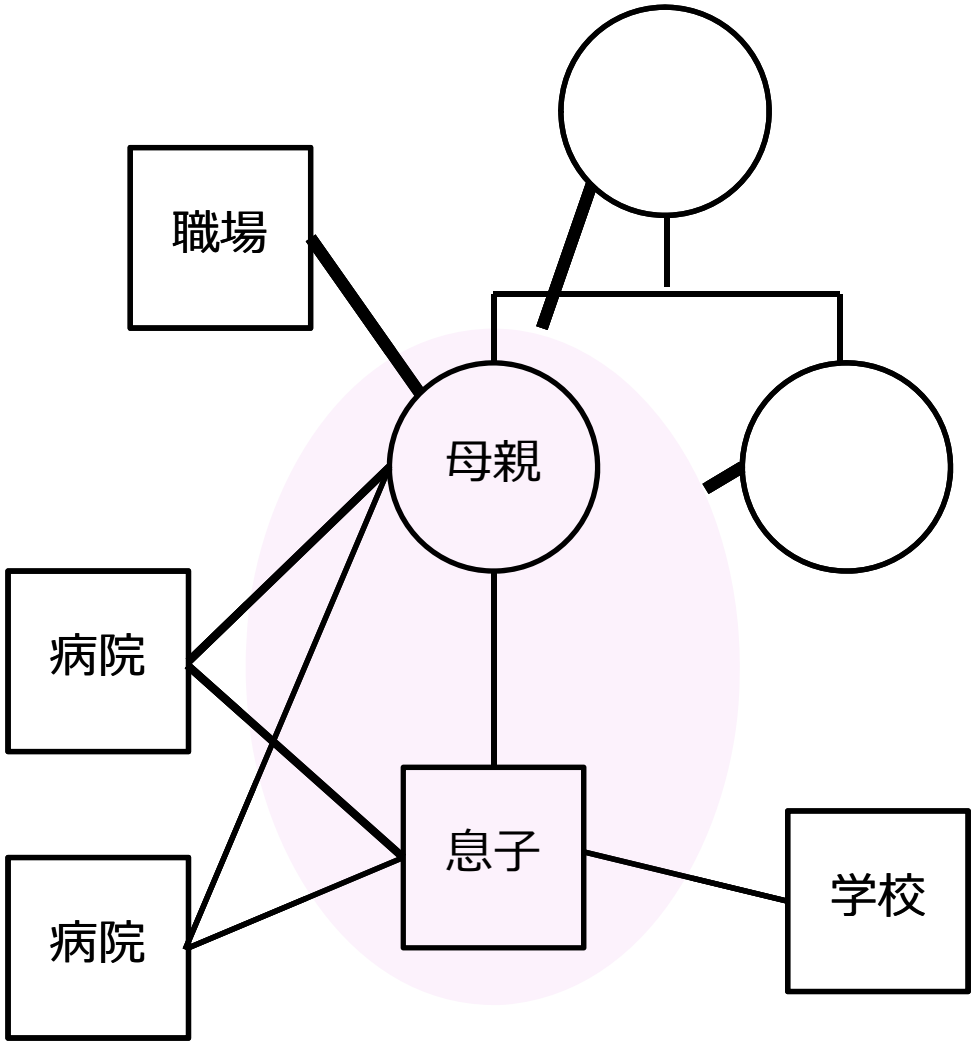
島嶼部に暮らす母子２人の家族。母親は観光業、息子は特別支援学校に通う10代。近くの母親の実母が住んでいるが、感染症拡大時は、実母にうつすことがないよう、行き来を控えた。

島の主な産業は観光業で、新型コロナウイルス感染拡大とともに職場はもちろん、島の機能が全て止まったようになった。

家の中だけで家族２人で過ごすようになり、息子は外出してはいけない状況に対してパニックを起こすなどがあった。また、息子は学校閉鎖だけでなく、持病のため数回の入院をし、ワクチン接種ができずに感染し、後遺症によって全身状態が低下してその度に生活を調整した。

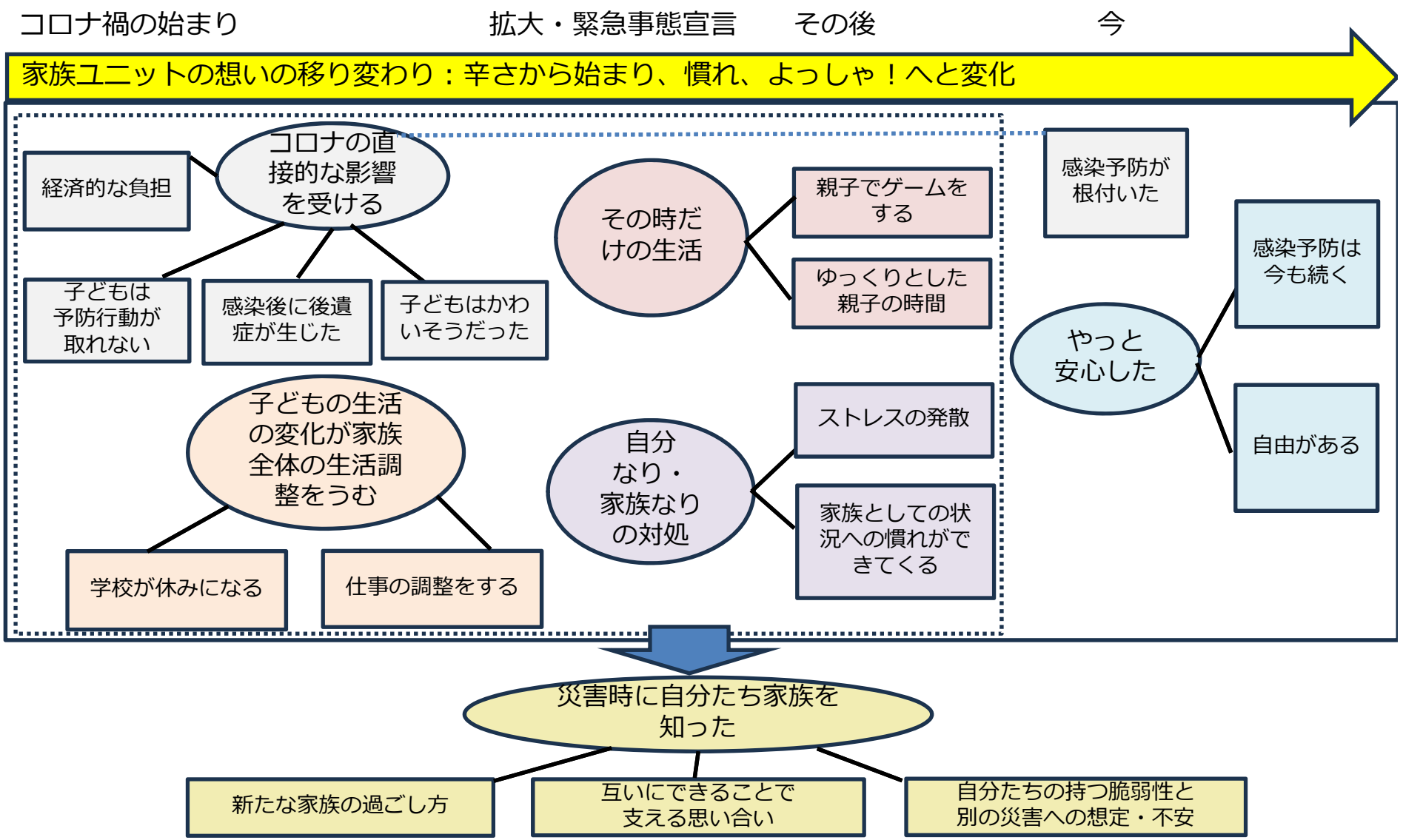
結果：家族 A

- エコマップ



結果：家族 A

- 分析結果図


コロナ禍の始まり
拡大・緊急事態宣言
その後
今
家族ユニットの想いの移り変わり：辛さから始まり、慣れ、よっしゃ！へと変化
コロナの直接的な影響を受ける
経済的な負担
子どもは予防行動が取れない
感染後に後遺症が生じた
子どもはかわいそうだった
その時だけの生活
親子でゲームをする
ゆっくりとした親子の時間
子どもの生活の変化が家族全体の生活調整をうむ
学校が休みになる
仕事の調整をする
自分なり・家族なりの対処
ストレスの発散
家族としての状況への慣れができてくる
感染予防が根付いた
やっと安心した
感染予防は今も続く
自由がある
災害時に自分たち家族を知った
新たな家族の過ごし方
互いにできることで支える思い合い
自分たちの持つ脆弱性と別の災害への想定・不安

結果：家族 A

- コロナ禍での抗えない変化の経験・その中での思い

家族は、コロナと共にある生活の辛さを経験しながらも、家族なりの対処を見つけ状況に適応し、そして安心とこれからだという思いの変化を経験した

1. コロナの直接的な影響を受ける

子どもの感染予防策のできにくさから新型コロナウイルス感染で後遺症が残った。感染予防と家にいなければならない生活は、子どもにはかわいそうだった。コロナ禍の開始・拡大は子どもと家族にとって辛さの始まりになった。

2. 子どもの生活の変化が家族全体の生活調整をうむ

子どもの生活変化に合わせた仕事や家族の過ごし方の調整が行われた。協力的で理解のある職場が支えてくれているという思いがあった。

3. その時だけの生活、自分・家族なりの対処

初めてゲームを子どもと一緒にするようになった。ゆっくりした二人の時間を持つ中で、二人だけで過ごすストレスを逃しながらコロナ禍の生活に適応していった。

4. やっと安心した

感染予防は今も続き、マスクや消毒薬は生活に根付いたが、自由を感じる今に安心の思いをもつ。

結果：家族 A

- 家族が得た力

◆【災害時に自分達家族を知った】

この期間を通じて家族が得た力は「新たな家族の過ごし方」といった具体的なものだけでなかった。

「互いにできることで支える思い合い」を言葉にしたりすることで思いを形にする力を得た。

子どもの状態が影響する「自分たちの持つ脆弱性と別の災害への想定・不安」の思いを認識することになり、このコロナ禍を通じて【災害時に自分たち家族を知った】経験となっていた。

結果：家族 B

- 家族の紹介

都市部に暮らす父親、母親、子どもの3人家族。父親は企業勤務。母親は主婦。息子は高校2年生で慢性疾患をもっている。

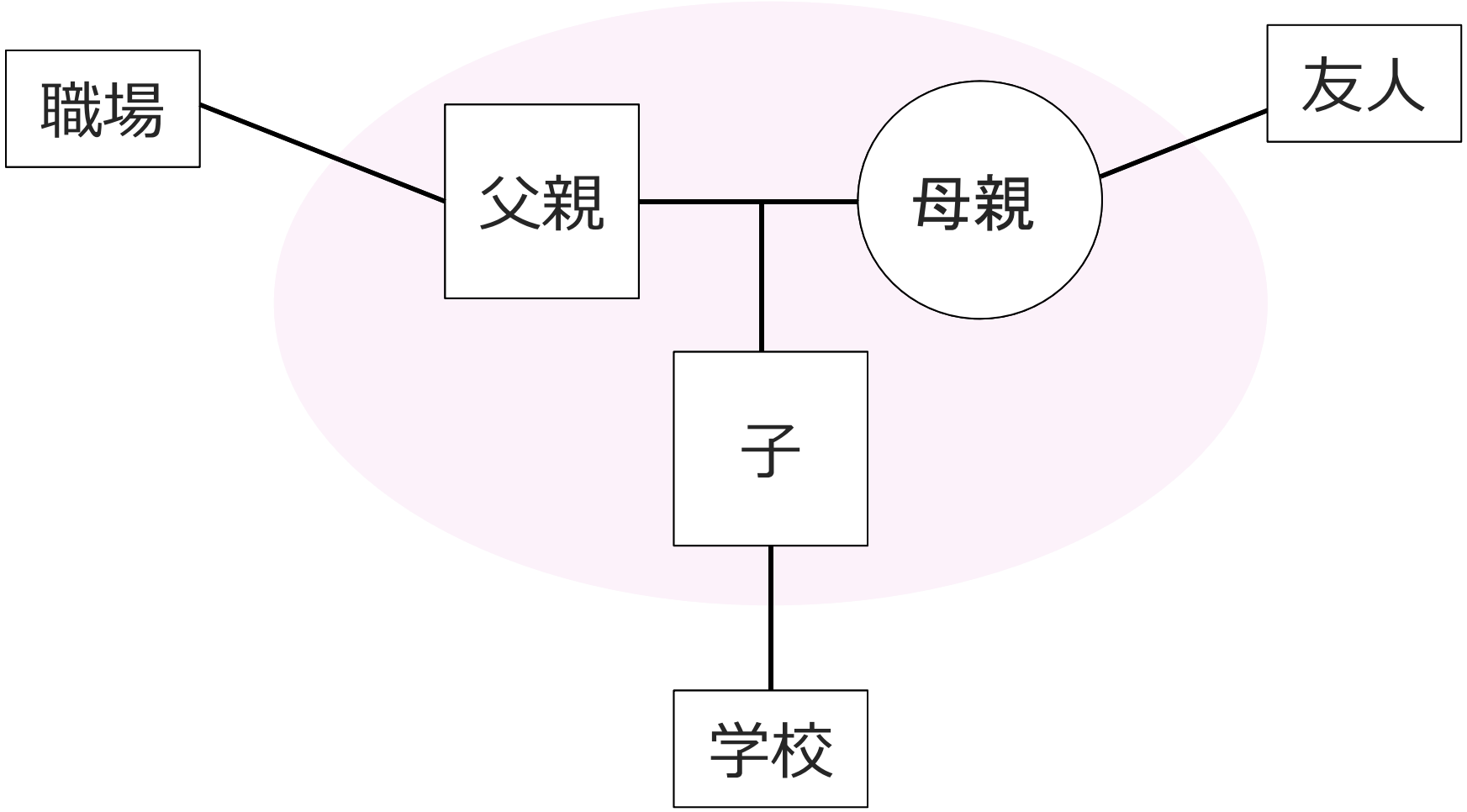
息子が小学6年生の2月に新型コロナウイルス感染拡大が始まった。小学校は一斉休校となり、卒業式は海外旅行中で出席できなかった。中学校の入学式は6月で、その前はオンライン授業であった。オンライン授業期間は家族が自宅で一緒に過ごす時間が多く、家族がいてよかったという気持ちを家族全員が抱いた。コロナ禍で父方祖父が亡くなり、葬儀をするときに親戚が集まることに困難があった。

現在は高校2年生の子どもの学校生活、父親の仕事、母親の生活はほぼ元通りである。

卒業と入学の節目に新型コロナウイルス感染拡大を経験し、国や学校の状況に振り回される経験をする中でも家族の大切さを実感した。

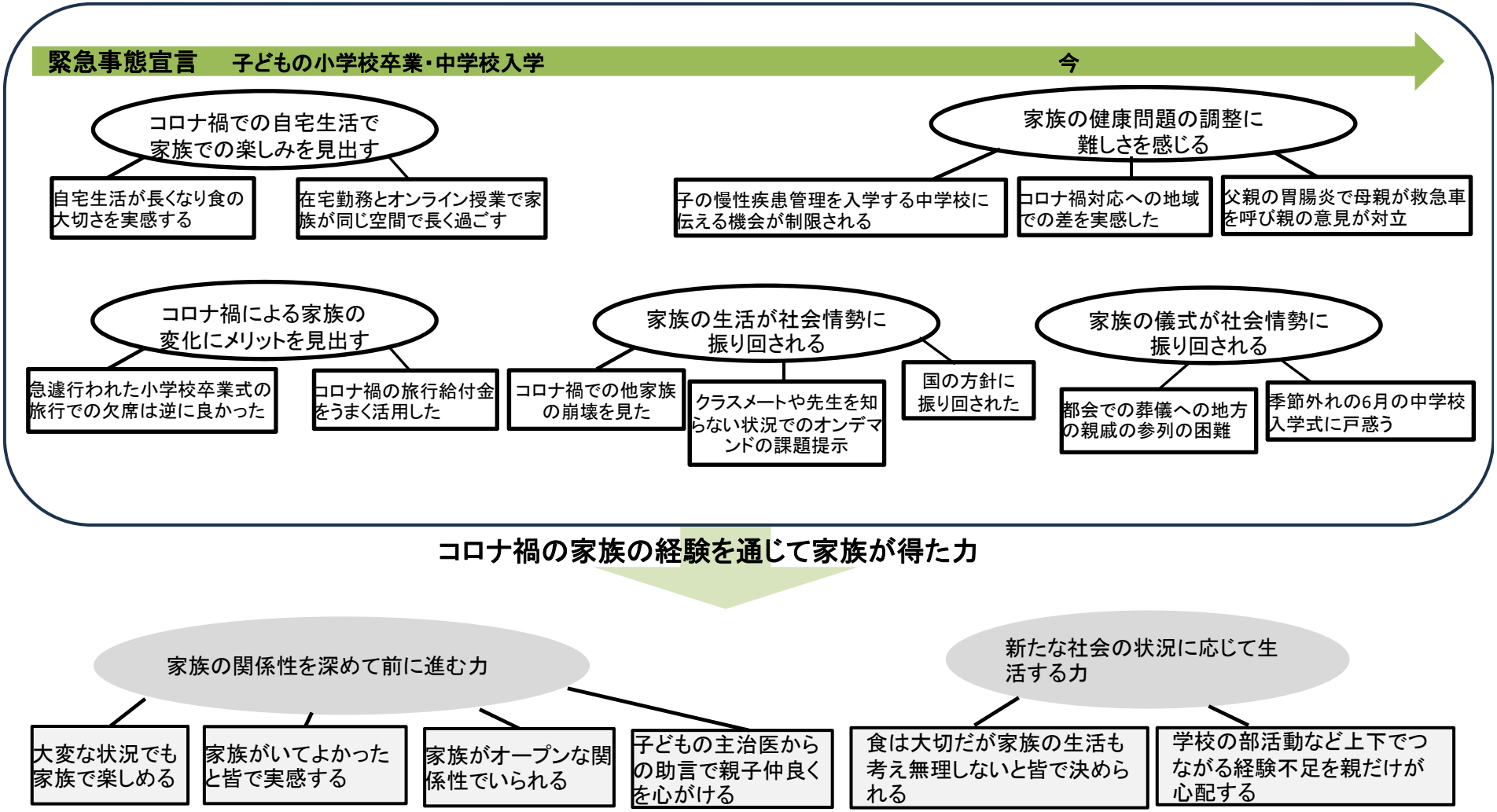
結果：家族 B

- エコマップ



結果：家族 B

- 分析結果図


緊急事態宣言　子どもの小学校卒業･中学校入学　今
コロナ禍での自宅生活で家族での楽しみを見出す
自宅生活が長くなり食の大切さを実感する
在宅勤務とオンライン授業で家族が同じ空間で長く過ごす
家族の健康問題の調整に難しさを感じる
子の慢性疾患管理を入学する中学校に伝える機会が制限される
コロナ禍対応への地域での差を実感した
父親の胃腸炎で母親が救急車を呼び親の意見が対立
コロナ禍による家族の変化にメリットを見出す
急遽行われた小学校卒業式の旅行での欠席は逆に良かった
コロナ禍の旅行給付金をうまく活用した
家族の生活が社会情勢に振り回される
コロナ禍での他家族の崩壊を見た
クラスメートや先生を知らない状況でのオンデマンドの課題提示
国の方針に振り回された
家族の儀式が社会情勢に振り回される
都会での葬儀への地方の親戚の参列の困難
季節外れの6月の中学校入学式に戸惑う
コロナ禍の家族の経験を通じて家族が得た力
家族の関係性を深めて前に進む力
大変な状況でも家族で楽しめる
家族がいてよかったと皆で実感する
家族がオープンな関係性でいられる
子どもの主治医からの助言で親子仲良くを心がける
新たな社会の状況に応じて生活する力
食は大切だが家族の生活も考え無理しないと皆で決められる
学校の部活動など上下でつながる経験不足を親だけが心配する

結果：家族 B

- コロナ禍での抗えない変化の経験・その中での思い

1. コロナ禍による家族の変化にメリットを見出す

中学入試後の旅行中に小学校の卒業式が終わっていたことに、家族全員が驚いた。しかし小学校に対して、子どもの慢性疾患への対応や、他の子どもとのトラブルへの不十分な対応をされた経験から不信があったことから、家族として「急遽行われた小学校卒業式の旅行での欠席はかえって良かった」と捉えた。

2. コロナ禍での自宅生活で家族での楽しみを見出す

「在宅勤務とオンライン授業で家族が同じ空間で長く過ごす」ことで、コロナ禍でなければできなかったことができたと捉え、小さな楽しみを見出していた。

3. 家族の生活が社会情勢に振り回される

コロナ禍で家族が「国の方針に振り回された」と感じ、「他家族の崩壊を見た」等の経験をしていた。子どもの入学前のオンデマンドでの授業では「クラスメートや先生を知らない状況でのオンデマンドの課題提示」を家族も把握しており、思い描いていた中学校生活とは異なることを家族が感じる経験となっていた。

結果：家族 B

- コロナ禍での抗えない変化の経験・その中での思い（つづき）

4. 家族の健康問題の調整に難しさを感じる

子どもの慢性疾患の健康管理で入学する中学校とのやり取りが必要であった。しかしコロナ禍の中で約束の機会が延期になるなど「子の慢性疾患管理を入学する中学校に伝える機会が制限される」経験をしていた。

5. 家族の儀式が社会情勢に振り回される

コロナ禍で亡くなった父方祖父の葬儀では、父親のきょうだいが地方から都会である葬儀が行われる場に移動することに、きょうだいの調整が大変である「都会での葬儀への地方の親戚の参列の困難」があった。新型コロナウイルス感染が原因で亡くなったのではない場合でも、家族の別れの儀式が思い描いている状況と異なってしまうことで、家族に困難が生じていた。また家族が待ち望んでいた中学校の入学式はコロナ禍で予定の時期には開催されず、先にオンライン授業を受けた後である6月の梅雨の時期に雨の中行われ、家族に戸惑いが生じていた。

結果：家族 B

- 家族が得た力

◆【家族の関係性を深めて前に進む力】

大変な状況でも家族で楽しみ、家族がいてよかったと皆で実感していた。そして子どもの主治医からの親子仲良くという助言を心がけて、家族がオープンな関係性でいられる関係性をつくり、前に進む力を得ていた。

◆【新たな社会の状況に応じて生活する力】

コロナ禍での在宅時間の増加から食は大切と実感したが、家族の生活全体も考えて無理しないと母親が決断し、それを家族皆で肯定して家族としての方針を決めることができていた。コロナ禍で子どもに生じた学校の部活動など上下でつながる経験不足を親が心配し、子どもは気にしない状況があり、家族としてはお互いの意見を尊重して生活を続けていた。このように、新たな社会の状況に応じて、家族として生活する力を得ていた。

結果：家族 C

- 家族の紹介

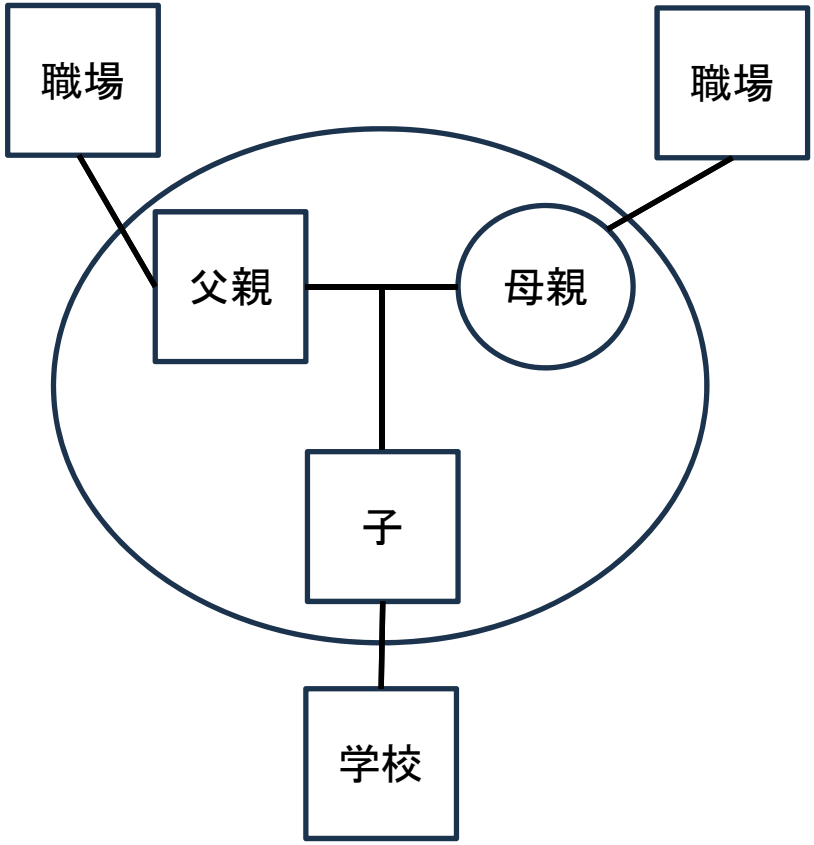
町村部に住む50代の夫婦・小学生の子どもの3人家族であり、父親は会社員でフルタイムで勤務しており、母親は自営業を営んでいる。

新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言を受けて、父親の仕事は完全にリモートによる勤務に変更となった。また、母親の仕事もまた人との接触が制限されるなかで、もともとの活動をすることが難しくなった。

子どもが緊急事態宣言の後、学校におけるマスク着用をめぐって、学校と対峙し、学校におけるマスク着用が求められた約10か月の期間、子どもは学校に行かないことを希望し、親は子どもの考えや気持ちを理解し、その選択を尊重した。

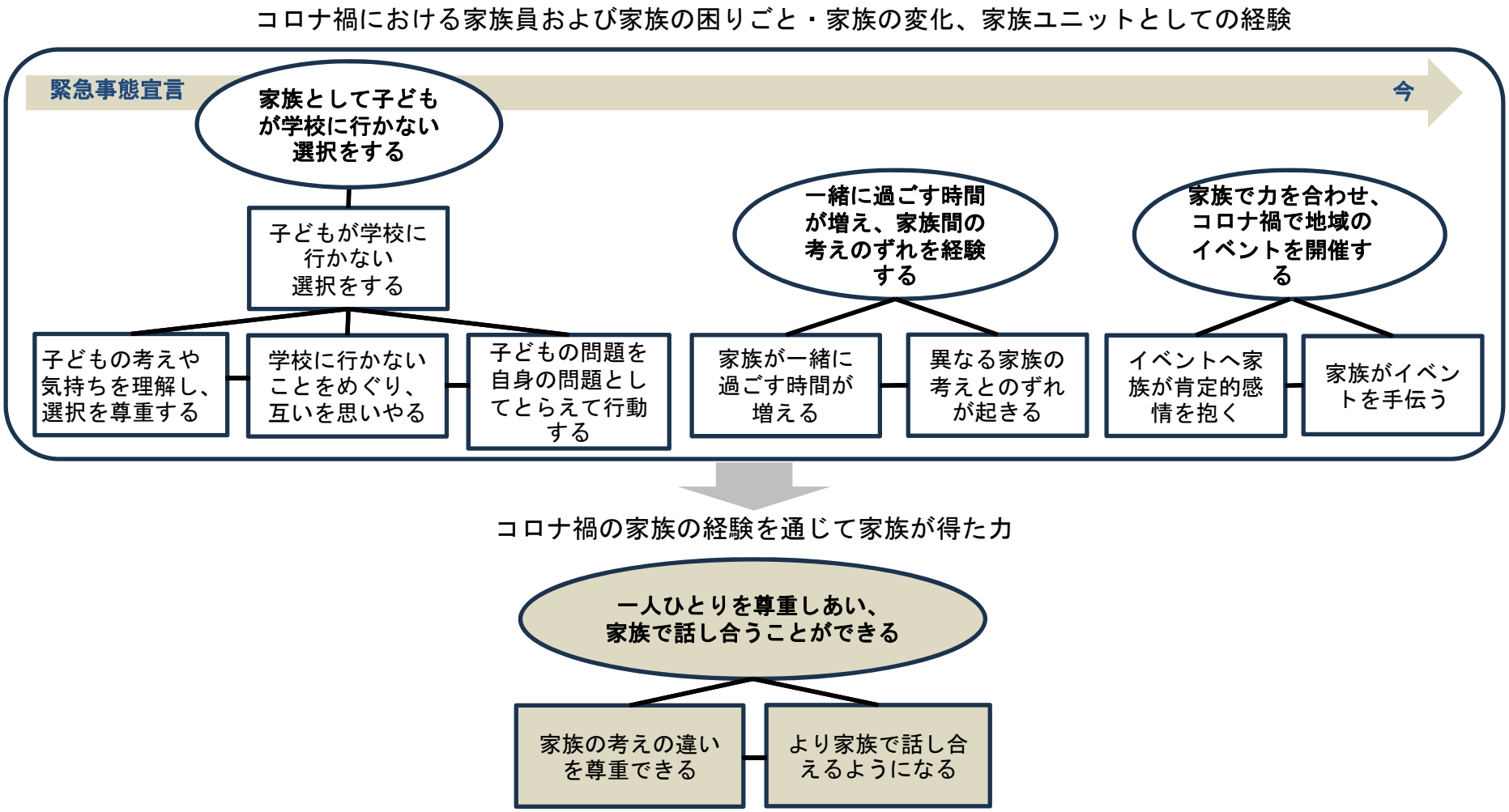
結果：家族 C

- エコマップ



結果：家族 C

- 分析結果図


コロナ禍における家族員および家族の困りごと・家族の変化、家族ユニットとしての経験
緊急事態宣言
今
家族として子どもが学校に行かない選択をする
子どもが学校に行かない選択をする
子どもの考えや気持ちを理解し、選択を尊重する
学校に行かないことをめぐり、互いを思いやる
子どもの問題を自身の問題としてとらえて行動する
一緒に過ごす時間が増え、家族間の考えのずれを経験する
家族が一緒に過ごす時間が増える
異なる家族の考えとのずれが起きる
家族で力を合わせ、コロナ禍で地域のイベントを開催する
イベントへ家族が肯定的感情を抱く
家族がイベントを手伝う
コロナ禍の家族の経験を通じて家族が得た力
一人ひとりを尊重しあい、家族で話し合うことができる
家族の考えの違いを尊重できる
より家族で話し合えるようになる

結果：家族 C

- コロナ禍での抗えない変化の経験・その中での思い

1．家族として子どもが学校に行かない選択をする

本事例では、登校時には必ずマスクをする必要があると考える学校と、マスクをする明確な根拠がないにもかかわらず、マスクをしなくてはならないことに疑問を感じる子どもという、子どもの学校生活におけるマスクの着用をめぐって、ずれが生じた。

結果として、学校に行かないという選択をした。その子どもの選択に対して、親は子どもの考えや気持ちを理解し、選択する意思を尊重して、親である自分の問題として問題をとらえて、学校と対峙した。また子どもは親が共感してくれていること、親は自分の考えの影響を子どもが強く受けていないかを懸念するなど、子どもの学校に行かない選択をめぐって、家族間でお互いを思いやるという経験をした。

結果：家族 C

- コロナ禍での抗えない変化の経験・その中での思い

２．一緒に過ごす時間が増え、家族間の考えのずれを経験する

本事例では、父親はコロナ禍において、仕事が完全にリモートでの形態となった。また母親は自営業であり、コロナ禍の影響を受けて、コロナ前と同じように営業することが難しくなった。子どもは、前述したように、学校に行かない選択をしたため、コロナ禍で家族で一緒に過ごす時間が増え、そのなかで、それぞれの家族間において、考えが異なることでの心理的なずれを経験した。

３．家族で力を合わせ、コロナ禍で地域のイベントを開催する

本事例では、コロナ禍で人が集まる機会が制限されるなか、母親が地域のなかでイベントを計画し、その開催において、父親や子どもの協力のもとで実施した。家族がコロナ禍において、このようなイベントを行う意味を理解し、実際に手伝いをした。母親は、家族の協力があって、開催することができ、またイベントを成功させることができたと、感謝の気持ちをもつ経験をした。

結果：家族 C

- 家族が得た力

◆【一人ひとりを尊重しあい、家族で話し合うことができる】

　それぞれの家族員の生活の変化、家族間の緊張や葛藤などの困難な状況を経験していた。そのような中、それぞれの家族員が互いの考えや価値観の違いを認識し、尊重し、家族で話し合えるようになる力を得ていた。

結果：家族 D

- 家族の紹介

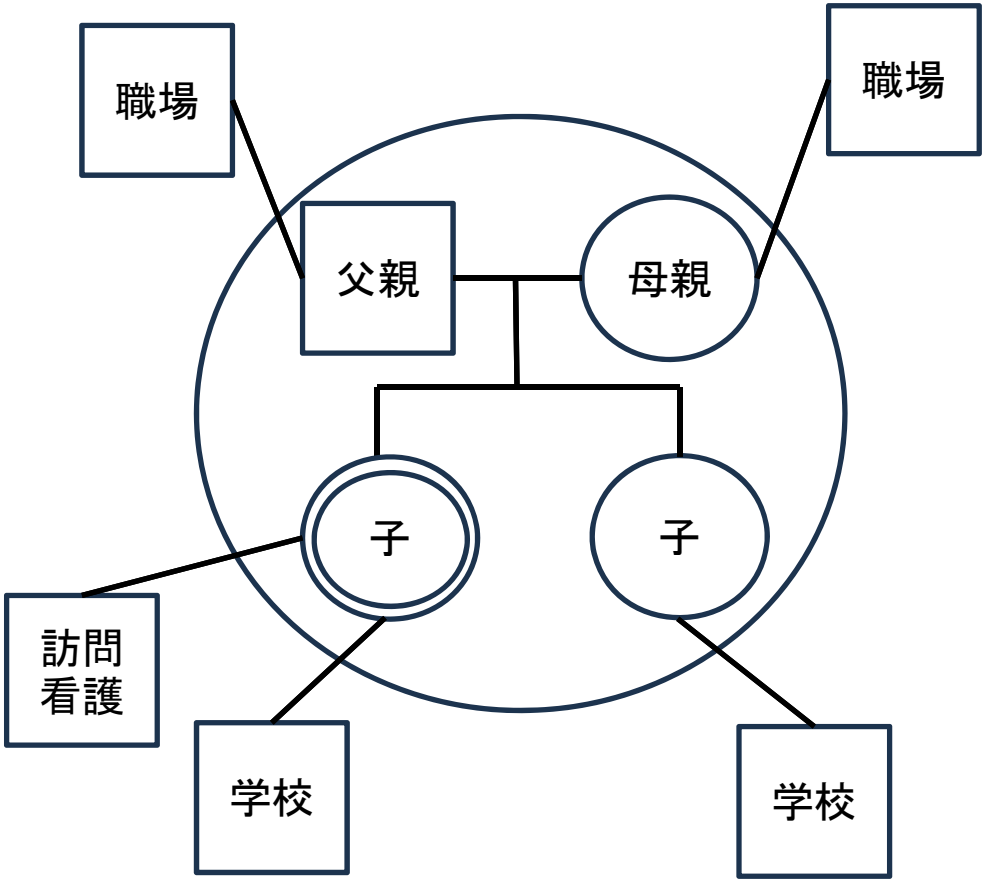
小都市に住む40代の夫婦、小学生の子ども２人の４人家族である。父親は慢性疾患があり、就業が難しい時期であり、母親は自営業を営んでいる。子どものうち、１人は常時、人工呼吸器を必要としており、特別支援学校に在籍し、訪問看護サービスなどを利用している。

人工呼吸器を利用する子どもが、コロナ禍が始まって間もない時期に、コロナウイルス感染症疑いで入院となり、父親もまた感染疑いにつき、娘とともに入院となった。そのため、家族の生活が分離された。

またコロナウイルス感染症の検査の結果は擬陽性であったが、受診していた医療機関で初のコロナ感染疑いの患者となったため、利用中の訪問看護ステーションなどは一時期、営業停止となるなど、周囲への影響があった。また、新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言を受けて、親の仕事が減少し、収入への影響を受けた。

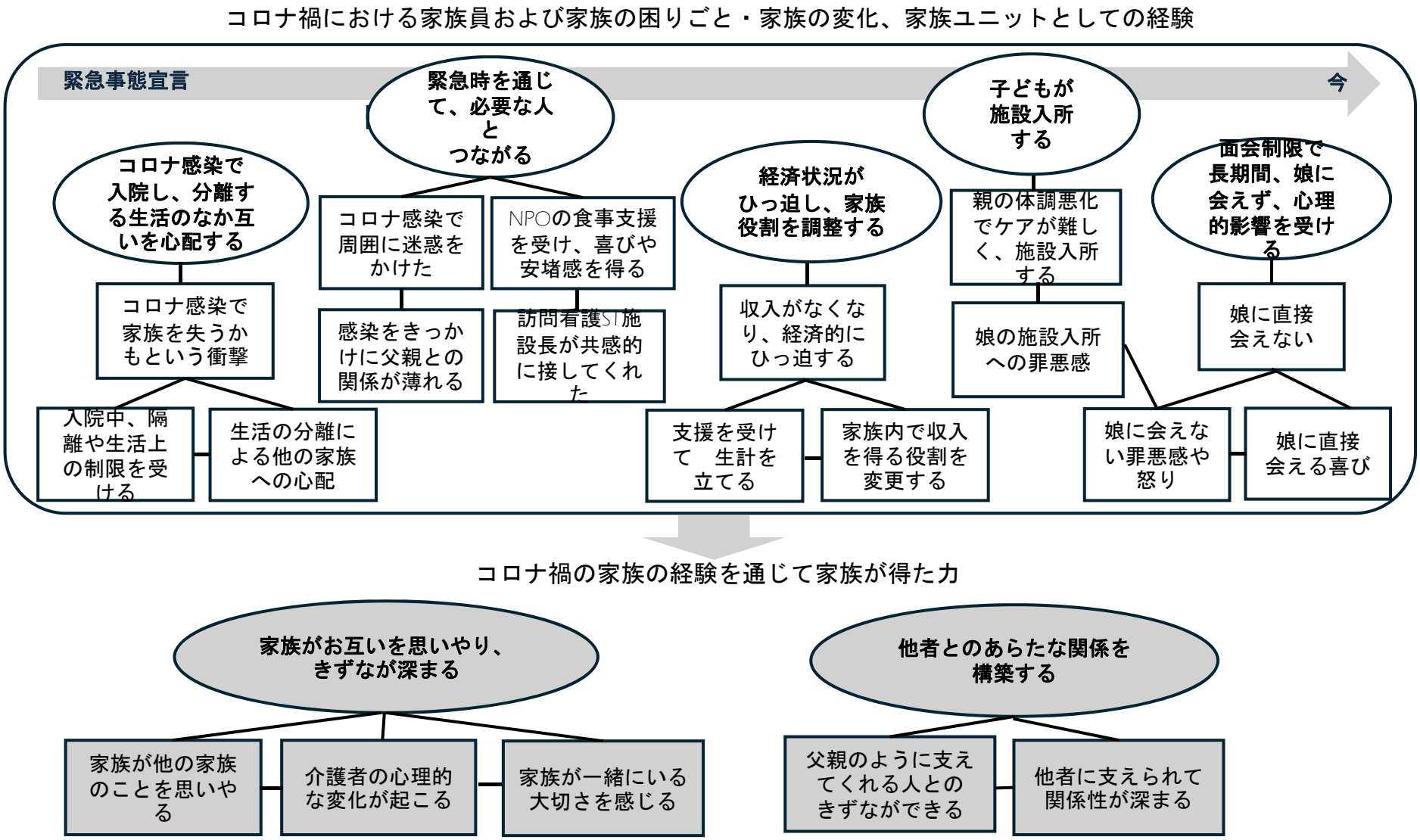
結果：家族 D

- エコマップ



結果：家族 D

- 分析結果図


コロナ禍における家族員および家族の困りごと・家族の変化、家族ユニットとしての経験
緊急事態宣言
今
コロナ感染で入院し、分離する生活のなか互いを心配する
緊急時を通じて、必要な人とつながる
経済状況がひっ迫し、家族役割を調整する
子どもが施設入所する
面会制限で長期間、娘に会えず、心理的影響を受ける
コロナ感染で家族を失うかもという衝撃
コロナ感染で周囲に迷惑をかけた
NPOの食事支援を受け、喜びや安堵感を得る
収入がなくなり、経済的にひっ迫する
親の体調悪化でケアが難しく、施設入所する
娘に直接会えない
入院中、隔離や生活上の制限を受ける
生活の分離による他の家族への心配
感染をきっかけに父親との関係が薄れる
訪問看護ST施設長が共感的に接してくれた
支援を受けて　生計を立てる
家族内で収入を得る役割を変更する
娘の施設入所への罪悪感
娘に会えない罪悪感や怒り
娘に直接会える喜び
コロナ禍の家族の経験を通じて家族が得た力
家族がお互いを思いやり、きずなが深まる
他者とのあらたな関係を構築する
家族が他の家族のことを思いやる
介護者の心理的な変化が起こる
家族が一緒にいる大切さを感じる
父親のように支えてくれる人とのきずながができる
他者に支えられて関係性が深まる

結果：家族 D

- コロナ禍での抗えない変化の経験・その中での思い

1．コロナ感染で入院し、分離した生活のなか互いを心配する

本事例では、コロナ禍が始まった早期において、人工呼吸器を利用している娘が新型コロナウイルス感染の疑いによって、入院を余儀なくされ、またその娘に父親が付き添い入院することで、家族が分離して生活することが必要となった。母親は、娘は人工呼吸器を日常的に利用している状況にあり、また父親も慢性疾患をもつゆえ、感染が懸念され、家族を失うかもしれないという衝撃を経験した。一方、父親は娘とともに入院生活を過ごすが、隔離や生活上の制限を経験するなかで、母親やその他の子どもを心配し、また心配をかけたくない思いで心配させないように明るくふるまいながら、連絡をとるなどの経験をしていた。

２．経済状況がひっ迫し、家族の役割を調整する

本事例では、コロナ禍のなかでもともとの仕事による収入を得ることが難しくなり、経済的な基盤が大きく揺らぐなかで、コロナ禍に対する補助金を申請することで、生計を立てることができた。またそれぞれの家族の状態、生活が大きく変化するなかにあって、家族内において経済的基盤を担う役割を変更するという役割の調整を行いながら、生活基盤の揺らぎに対して対処していた。

結果：家族 D

- コロナ禍での抗えない変化の経験・その中での思い（つづき）

３．緊急時を通じて、必要な人とのつながりがみえる

本事例では、コロナ禍の早期において、娘と父親が感染疑いによる入院となったが、受診していた医療機関において初めてのコロナウイルス感染疑いの患者となったため、感染したことの責任を感じていた。また利用していた訪問看護ステーションにおいても、利用者への訪問を停止せざるを得ない状況になったため、そのことについても申し訳なさを感じる経験をしていた。しかし、利用していた訪問看護ステーションの施設長が、家族の心情を理解し、共感的に接してくれたこと、地域のNPOが無料の食事支援を家族に対して提供してくれることで、喜びや安堵感を経験していた。一方で、感染疑いで入院したことに対する言葉をきっかけにして、祖父との関係が疎遠になるという経験もしていた。

結果：家族 D

- コロナ禍での抗えない変化の経験・その中での思い（つづき）

４．子どもが施設入所する

本事例では、コロナ禍において起こる生活や健康状態の変化が著しく、人工呼吸器を利用している娘のケアが在宅において困難となった。そのタイミングで入所施設に空床が出たことで、施設に入所するという選択をした。このような状況での施設入所となったために、親は自分がケアできなくなったことで娘と離れて生活することに対し、申し訳なさを抱いていた。

５．面会制限により娘に長期間会えず、心理的影響を受ける

本事例では、娘が施設入所したものの、コロナ禍において長期間に渡って、面会制限を受け、LINE面会のみで２年間、直接会うことができなかったという経験をしていた。そのため、娘に会えないことによる親としての罪悪感や、新型コロナウイルス感染拡大に対するぶつけどころのない怒りなど、娘に会えないことによる心理的影響を受けていた。さらには２年間という時間を経て、直接会えることで、体が震えるほどの喜びも経験していた。

結果：家族 D

- 家族が得た力

◆【家族がお互いを思いやり、きずなが深まる】

コロナ禍における固有の経験のなかで、家族が他の家族のことを思いやり、また主介護者の心理的な変化が起こっていた。そのなかで、家族が一緒にいることの大切さを感じる経験をし、家族がお互いを思いやる力を得て、家族としてのきずなを深めていた。

◆【あらたな他者との関係を構築する】

緊急事態ともいえるコロナ禍の経験のなかで、 支援をしてくれる他者に支えられ、それらの人々との関係性が深め、また父親のように支えてくれる人とのきずなを構築するなど、あらたな他者との関係・つながりを構築する力を得ていた。

考察

- 新型コロナウイルス感染拡大下での家族の経験の特徴と家族が得た力について、考察する。

1．各事例の考察
   - 家族機能の特徴、家族の経験、家族が得た力について、困難や逆境に直面したときに適応して立ち直る力またはそのプロセスである家族レジリエンスの概念（Walsh,2012）をもとに考察

2．4事例の共通点
   - 各事例の考察を踏まえ、4事例に共通する経験について考察

考察：事例 A

- 慢性的なケアを必要とする子どもと母親の家族は、医療面を含めてコロナ禍以前から、しなやかに周囲の人々と繋がりを作り、調整する力を持つ家族であった。
- 新型コロナウイルス感染拡大は、平常時には感じない元々の脆弱性に直面する経験であったが、それらを否定したり、パニックに陥ることなく、脆弱性を認識をして次に向かう前向きな姿勢を示した家族であった。
- そもそもの家族の持つ強み、弱みが顕著になったことは、事例Aの家族の機能の変化であった。
- この家族に象徴的なことは、弱みの増幅に対して具体的な行動としての機能の追加（新しい家族の過ごし方など）を得るだけでなく、自分たち家族の認識を進化させ蓄積したことである。一見、何も変化していないように見えるこの力は、未来の不確かな困難に、しなやかに対処する力を発揮する土台と考えられ、この家族らしい機能の変化とともに、レジリエンスの有り様である。
- 事例Aの家族は、コロナ禍以前から状況に合わせた家族内外の調整力を見せ、レジリエンスが高いが、このしなやかな適応性と立ち直る力が、コロナ禍によってさらに深化していったと考える。

考察：事例 B

- 事例Bは、核家族で、子ども、父親、母親の関係性は良好であり、コロナ禍前からコミュニケーションを良好に取るなど、精神機能が十分に発揮されていた。また子どもの慢性疾患を主治医と相談しながら、母親を中心に家族で管理していた。また小学校や中学校との交渉も家族が共通理解をしながら進めていたことから、ヘルスケア機能・社会化機能を十分に有していると考えられる。
- 感染拡大早期に小学6年生の息子が卒業・入学を迎え、家族行事が新型コロナウイルス感染拡大による政策により大きく変化し、振り回される経験をしつつも楽しみを見出せていたのは、元々の家族の機能が良好であったことも一因と考えられる。コロナ禍を経て、子どもの年齢が高くなり、子どもが社会の中で果たせる役割が増えたこともあったためか、家族の機能は向上していたように考察できる。コロナ禍での経験を基に、家族の関係性を深めて前に進む力が獲得されていた。また各家族員それぞれが社会とつながっていることから、新たな社会の状況に応じて生活する力が身に着いていた。
- 家族レジリエンスはコロナ禍前から高く、そのことがコロナ禍で家族の支えとなり、さらにレジリエンスが高くなることにつながっていたと推測される。家族レジリエンスの向上の背景にあるものは、経済機能の安定、社会との広いつながりを各家族員が有していたことがあると考えられる。さらに家族内のコミュニケーションが良好であったことから、家族員それぞれが社会から得た情報を家族員同士で伝えあい、家族としての知識を増やし、精神的なつながりを強固していた。このことが家族レジリエンス向上を支援していたと考えられる。

考察：事例 C

- 父親はリモートによる在宅勤務、母親もそれまでと同じ活動が難しくなり、両親とも仕事のスタイルが大きく変わった。また子どもはマスク着用をめぐり、約10か月間、学校に行かない選択をした。このように、各家族員の生活が大きく変化することで、家族で過ごす時間が著しく増加した。
- このような生活の変化により、父親ではワークライフバランスがとりにくい状況、母親の養育役割は増えていた。また子どもが学校に行かないことは、子どもにとって甚大な心理社会的影響を及ぼし、親にも心理的混乱や葛藤を生むストレスフルな経験であった。
- しかし、そのようななかで各家族員が自らの意見を伝え、考えや価値観の違いを認識し、時に考えや価値観のずれに葛藤や緊張を感じながらも、互いの考えや価値観を共有し、理解しあっていた。なかでも子どもが学校に行かない選択は、家族全体に影響を与える重大な選択であったが、親は養育観や教育観に基づき、子どもとの関係を考え、子ども自身の考えや心情を理解し共感的に受け止め、子どもの学校に行かない選択を支持した。子どもも親が共感し、理解してくれていると子どもなりに感じ取っていた。
- 家族員がよく話し合い、親が子どもに正直なコミュニケーションを積極的にとり、また子ども、親それぞれが学校との明確なコミュニケーションをとっていた。このような家族内・外におけるコミュニケーションの促進は、問題解決や家族レジリエンス上、重要な意味をもっていた。
- さらにコロナ禍下で人々のつながりが制限されるなか、地域で人々がつながりあう機会を家族が協力して行う体験もした。母親の意向を父親や子どもが理解し、共感し、同じ目的に向かって家族員が協力し合う体験は、家族間コミュニケーションを促進し、ストレスや課題に適応するうえで重要であったと考えられる。

考察：事例 D

- 感染拡大早期に、人工呼吸器を要する子どもが新型コロナウイルス感染の疑いのため入院し、父親も付き添うことで、家族生活が分離した。また医療的ケアや疾病をもつ家族の感染疑いは、他の家族員にとって家族の生命が失われるかもしれない衝撃であった。
- 仕事への影響も大きく、生活基盤が大きく揺るがされ、親の健康状態が保てなくなり、子どもの施設入所を決断したが、面会制限により長期間、直接面会できなかった。
- このように、本事例では、それまでの生活の喪失、生活を支える他者とのつながりの変化、経済的な変化など、ストレスとなる出来事が複数、重なり合う経験であった。
- 主養育者にとっては、子どもの施設への移行に伴うケア役割の変更、いつ面会できるかわからない不確実性のなか、わが子と分離する生活を長期的に強いられるという、それまでにない体験であった。
- 多重のストレスを経験する混乱や葛藤のなか、家族員相互のコミュニケーションが強化されていた。父親と子どもが入院している期間も互いを心配し合い、ICTを利用して顔のみえるコミュニケーションを継続していた。
- 経済的影響が大きかったが、家族員が経済的な基盤を担う役割、子どもを養育する役割を調整するなどの柔軟性をもち、協力的に対応するという問題解決への対処をしていた。
- 本事例では、家族構造に影響を与える危機ともいえる体験を、家族員が共有し、問題解決に向けて対処し、家族内部のきずなを強めるとともに、家族を支える他者とのあらたな強いつながりをも得ていた。

考察：　家族における経験の意味づけ

- 本研究の対象者の経験は、それぞれの家族のユニークな経験だったが、家族機能の新しいパターンを確立し成長する点で共通していた。これは、機能単位の家族におけるリスクとレジリエンスに焦点を当てる概念である家族レジリエンス（Walsh, 2012）で検討可能と考えられる。
- 本研究での事例Aでは家族の適応性と立ち直る力、事例 Bでは家族の関係性の深まり、事例Cでは家族の緊密性、事例Ｄでは家族の分離という対極ともとれる経験であったが、コロナ禍に固有の経験という点で共通していた。またそれぞれの家族にとって、生活の変化や喪失を伴う強い経験と考えられたが、各事例では共通して、コロナ禍での経験があったからこそいまの家族があるという意味づけを、家族自身で行っていた。

家族レジリエンスの視点では、意味づけ（Meaning Making）はレジリエンスを高める主要な要素の一つであり(Walsh, 1996; Walsh, 2003), Walsh(2020)は、この新型コロナウイルス感染拡大における辛い経験に対して、意味づけのための時間や、リフレクションを共有する必要性を述べている。これらの家族はコロナ禍に固有のこれらの経験に対して、時間の経過や、家族や家族を取り巻く人々とのつながりのなかで、家族それぞれに意味を見出すことができており、それゆえに家族としての何らかの力を得て、結果として家族レジリエンスを向上させていたと考えられる。

考察：臨床への示唆

- 本研究の対象となった家族は、どの事例でも従来とは異なる状況を経験し、家族員間でも思いが異なることもあった。
- 認知発達の途上の子どもは状況の理解が難しい場合がある。そのため納得いかないことを強制され、皆と同じようにしないと社会での生活が営めないと負担を感じ、そのことが家族全体にも影響していた。

緊急時には、子どもの声が社会に届きにくく、受け容れられにくい状況が生じたことを記憶し、子どもに生じる負担を予測して支援する必要がある

- 社会的経験が制約されたときの子どもの発達段階によって発達課題の達成状況が変化する。
- その後の子どもおよび家族の発達にも影響し、家族機能・成長発達に与える影響も異なる可能性がある。

医療者は、アセスメントの視点の一つに、その対象者がコロナ禍をいつ経験したかを念頭に置いて支援する必要がある

結論と提言

- 新型コロナウイルス感染症拡大の中での子どもを養育する家族ユニット構成員（家族員）および家族の困りごと、家族の変化・必要な調整や調整の結果として家族が得た力あるいは機能不全の有り様など、家族ユニットとしての経験を明らかにすることを目的に、フォトボイス法によるインタビュー調査を実施し、テーマ分析を行った。
- 小学生、中学生、高校生の子どもを養育する４家族の新型コロナウイルス感染拡大下での経験を明らかにし、それぞれの家族の特徴と共通する経験を明らかにした。今後、コロナ禍と同様の事象が再度起きた時に、本研究で明らかになった結果をもとに支援することができると考える。
- フォトボイス法を用いたデータ収集により、子どもを含めた家族の経験を明らかにすることができ、家族を対象とした今後の研究への適用可能性が見出された。

謝辞

本調査にご協力くださったご家族の皆様に、心から感謝申し上げます。

本調査は、一般社団法人日本家族看護学会総務委員COVID-19調査研究プロジェクトの一環として行われました。

文献

1) 国立成育医療研究センターコロナ×こども本部．コロナ×こどもアンケート第７回調査報告書．2023. https://www.ncchd.go.jp/center/activity/covid19_kodomo/report/finreport_07_oth.html（アクセス2025年3月29日）
2) 田中哲. コロナ禍における子どもたちのメンタルヘルス. 東京の精神保健福祉. 41(1), 5-9, 2021.
3) 西館有沙. With & Afterコロナ禍での育児(第3回) 長期の自粛による子どもの成長や発達への影響. 臨床助産ケア. 13(6), 89-93, 2021.
4) 福間理子, 長谷川潤一, 西村陽子, 本間千夏, 古谷菜摘, 倉﨑昭子, 近藤春裕, 鈴木直. 妊婦のコロナウイルス感染予防実態調査. 日本周産期・新生児医学会雑誌. 57(1), 230-233, 2021.
5) 大谷ゆい, 中嶋萌, 岡野宏紀, 平井ゆり, 田中恭子.【COVID-19と小児医療(Part1)】COVID-19流行下での子どものこころのケア. 東京小児科医会報. 39(2), 45-50, 2020.
6) 能條歩. コロナ禍における乳幼児の保護者の「困り感」. 北海道教育大学紀要（教育科学編）. 72(1), 475-484, 2021.
7) 半谷まゆみ. コロナ禍における子どもたちの生活と健康『コロナ×こどもアンケート』調査結果より. 小児保健研究. 80(1), 9-14, 2021.
8) 五十嵐光.【コロナ禍と子どもの健康 日常を取り戻すために】コロナ禍のシングルマザーと子どもの暮らし 家計と健康への影響. 月刊保団連. 1353, 10-15, 2021.
9) 西坂昌美.【コロナ禍を考える(4): 介護と医療の現場から】コロナにまけない!食料×生活支援プロジェクト(東京都豊島区南大塚) : アンケートから考える「ひとり親家庭・母子家庭」に求められる支援. いのちとくらし研究所報. 75, 14-23, 2021.
10) Feinberg, M. E., A Mogle, J., Lee, J. K., Tornello, S. L., Hostetler, M. L., Cifelli, J. A., Bai, S., & Hotez, E. Impact of the COVID-19 Pandemic on Parent, Child, and Family Functioning. Family process. 61(1), 361-374. 2022.
11) 田原麻由 時田章史, 石幡理絵, 磯崎宏美, 中山葉月, 沼田遥, 川上雄平, 村木國夫, 浦島崇. 東京都港区内の小児における新型コロナウイルス濃厚接触者および非濃厚接触者それぞれのSARS-CoV-2検査陽性率の検討. 小児科臨床. 74(1), 33-35, 2021.
12) 足立拓也, 佐野 正浩, 有髙 奈々絵. 新型コロナウイルス感染者から聴取した感染経路に関する考察. 感染症学雑誌. 94(6), 855-857, 2020.
13) 井田裕子, 浅原佳紀, 揚野裕紀子. COVID-19にて休校中の中学生とその保護者のこころの健康に関する意識調査. インターナショナルNursing Care Research, 20(3), 69-78, 2021.
14) 国藤ゆかり, 藤本太陽, 中村雅子. 新型コロナウイルス感染症の休校措置によるA小学校児童の心とからだへの影響と今後の取り組み 児童の実態調査に着目して. 福祉健康科学研究 .16, 129-137, 2021.
15) Shaw P. A. Photo-elicitation and photo-voice: using visual methodological tools to engage with younger children’s voices about inclusion in education. International Journal of Research & Method in Education. 44(4), 337-351. 2020.
16) Braun, V., Clarke, V. Using thematic analysis in psychology. Qualitative Research in Psychology. 3 (2), 77–101. 2006.
17) Walsh, F. Family Resilience Strengths Forged through Adversity. Normal Family Process (4th ed), New York: Guilford Press, 399-427. 2012.
18) Walsh, F. The concept of family resilience: crisis and challenge. Family process, 35(3), 261-281. 1996.
19) Walsh, F. Family resilience: a framework for clinical practice. Family process, 42(1), 1-18. 2003.
20) Walsh, F. Loss and Resilience in the Time of COVID-19: Meaning Making, Hope, and Transcendence. Family process, 59(3), 898-911.2020.